

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ミツエの住む「町」は周りの「村」といつしよに「市」になった。そのため新学期から町の子と村の子はそれぞれの小学校から新しくできた小学校に移った。年配の斉木先生がミツエたちの担任で、好きな橋本先生は六年生の担任だった。新しい学校生活も七月をむかえていた。

「自分のことを、おれと言う男子は手を上げて」

と国語の時間の終りに、教科書と関係なく斉木先生が言った。ミツエは振り向いて、男子の席の方を見た。ほとんど全員が手を上げているようだった。

「では、ぼくと言う人は？」

誰も手を上げなかった。何人かの男子がクスクス笑った。ぼくなんて、すかして、気取ってる、という笑い声だとミツエは思った。

「では、女子は何と言いますか？」

ミツエは自分のことをおれと言うが、黙っていた。

「あたしは、あたしって言います」

と関のぼるが言った。あたしというの、すかしてるが、関のぼるは全体としてすかしてるのが普通の子だから、誰も笑わなかった。

「ほかに、あたしとか、わたしと言う人はいますか？」

女子でも六年生ぐらいになると、おれからあたしに言いかえる時期がある。ミツエもたまに、すかして、あたしと言ってみることがある。みんなそうだ。でもそれは手を上げるほどではないと思う。振り返ってみると、やっぱり誰も手を上げていなかった。

教室から出ていった。

体操の時間は斉木先生が六年生の教室に行き、六年担任の橋本先生が三年生の体操の授業をする。君塚照子や澄子たち四人は、いつも早く着がえて、橋本先生を迎えに行くのだ。橋本先生は、モト村の小学校の先生だった。

③ 体操の時間なんてなければいいのに、と思いながらミツエは、のろのろとブルマーに着がえ、関のぼるたちと校庭に出た。

「あの子たちが、何であんなに早く着がえられるのか、わかった。体操のある日は、スカートの下にブルマーをはいてくるんだ」

「頭いい！ おれもそうしようかな」

「橋本先生、遅えなあ」

女子たちは、おしゃべりしたり笑ったりしながら先生を待っているが、ミツエは、一番苦手な体操の時間が橋本先生だなんて、と重い息を吐きたような気持ちで黙り込んでいた。

校舎の大きい方の玄関から、白い野球帽をかぶって白い体操ズボンをはいた橋本先生が、君塚照子たち四人と一緒に出てくるのが見えた。照子は先生の腕に自分の腕をからませている。うしろから、背の高い二谷カヨ子と、なんだかいつも風邪をひいているような根本千代と、ミツエの隣の席の大山澄子がついてくる。④ 照子が先生に甘えるような仕草をして、先生は腕を力瘤自慢の形にした。照子の足が地面から離れ、照子は先生の腕にぶらさがった。すぐに先生は腕を下げ、照子の足は地面に着いたが、照子はそのまま腕をからませている。みんなが見ているのに、なぜ先生は腕を振りほどかないのだろう。ミツエは見ているのが恥ずかしいような気がして、校舎の方に眼をそらした。

「集合ーっ」

と大きな声で言った先生の方にミツエが眼を戻したとき、腕をからませた

「では、ほかの女子は何と言いますか？」

ミツエは、また「町」が「市」になったのだから、女子は自分のことを「おれ」と言うのはやめて「あたし」と言いましよう、と言われるのかもしれないと思った。

「おれ」

と、わさび屋の三田はる子が、① ぶっきらぼうに言った。

「では、おれと言う女子は？」

ミツエは、手を上げた。関のぼる以外のみんなが、中途半端に手を上げていた。

「私はずっとこの町で生まれ育ちましたけれど、師範学校に行っていたときだけ、東京で下宿をしました。私もこの町にいた間はおれと言っていました」

たが、東京の人はわたしと言っていました」

やっぱり思ったとおりの話らしい、とミツエは思った。

「私は自分がとても恥ずかしいような気がして、お友達となかなか話ができませんでした。でも、だんだんわかってくると、みんな同じように気おくれを感じていたんですね。思いきって話してみれば、みんな、② たようなものだったのです」

先生はそう言って、にっこり笑った。もっと話が続くのかと思ったが、先生はそれで話をやめ、外を見て「やっと外で体操ができるようになりましたねえ。つぎは体操ですから、仕度をしましょう」と言った。③ ミツエが思っていた話とは違っていた。

先生は、モト村の子と、モト村の子、とは言わなかったが、お互いに話をしないことを知っているらしい。それは言葉のせいだと思っっているらしい。でも、それだけではないらしいことがわかっていくだろうか、とミツエが考えているうちに、モト村の四人の女の子たちは、さっさと着がえて

ままの照子はもう一度ぶらさがるように、ぴよんと跳び上がった。先生の肩が傾いて、照子の膝が変なふうに曲り、一瞬、先生の脚を照子の脚が挟むような形になった。ミツエは自分の顔が赤くなったような気がした。君塚照子はみんなに見せるためにしてるんだ、「橋本先生はおれたちの先生だった、おれたちは、お前たちよりずっと前から先生と仲良しだった」と言ってるみたいだ、とミツエは思った。

「今日は鉄棒をやる」

と橋本先生が言ったので、やっぱり体操の時間なんてなければいいのに、とミツエは思った。

準備体操のあと、ブランコより校舎寄りにある鉄棒のところへ行った。鉄棒は、中高低二本ずつ一続きのものと、六年生でも跳び上がらなければつかめない高さの独立したものが一本あった。男子のあとに女子で、背の順に一人ずつ鉄棒をする脇で、橋本先生が「ホジヨ」をした。尻上がりや足かけ上がりは、ミツエにもできた。

⑤ つぎは逆上がり

ミツエは死にたくなった。列からすこし横に出て、先に逆上がりをしている男子から何か参考になることを見つけようと、一人一人の逆上がりをよく見た。逆上がりができる子は、なぜあんなに何でもないので、鉄棒に巻きついてしまえるのだろうか、腕の力が強いのだろうか、蹴り上げ方が上手なのだろうか、と見ながら考えた。男子で一番稽せている高岡君は、巻きつけずに途中でほぐれてしまった。自分もああなるのだ、とミツエは思った。

男子が終り、女子で一番背の低いミツエの番になった。見たことも、考えたことも、もう何の役にも立たなかった。わかるのはただ、みんなが見ていることと、すぐ横に橋本先生がいることだけだった。ミツエは眼をつ

むるような気持ちで鉄棒をつかみ、足を振り上げた。先生が手でお尻をササえてくれたが、足はストンと落ちてしまった。

「もう一息だ」

と先生は言ってくれたが、やっぱりだめだった、と恥ずかしさを感じながら、男子たちの横にしゃがんだ。でも、とミツエは、今感じたものを、もう一度思い出してみた。鉄棒をしながら感じた感じは、する前に思っていたのと、すこし違っていた。前に逆上がりをしたときは、鉄棒が遠い感じで、腕に力が入らず、体がばらばらになつてしまうような感じだった。でも今回は、そのときよりも、すこし鉄棒が自分の中心に近い感じで、体も前ほどばらばらではなかったような気がする。

女子も一とおり逆上がりを終えると、先生は時計を見て言った。

「今日は始業が遅れて、あまり時間がないが、あとの時間は逆上がりができない者のトクンをする。できた者はこちに並んで、やはり逆上がりをする。できなかった者、こちに並べ」

男子で逆上がりができなかったのは高岡君一人、女子はミツエと、松原里美と、一番背の高い二谷カヨ子の三人だった。四人ではすぐに順番がまわってくる。先生は「つぎ」と言う以外、何も言わずに一人一人のお尻に手を添えた。何度目かに、思いがけず里美がくると鉄棒のまわりに巻きついた。

「できたじゃないか！」と先生が言った。

「できた！」

と里美が、眼をまん丸くし、口も大きくあけて、空に叫ぶように言った。むこうの列から仲良しの木崎富子^{ぎき}が飛んできて、二人で手を取り合つて「できた、できた」とピョンピョンはねた。

高岡君は途中で照れ臭^{くさ}そうに笑つて、あきらめた顔になる。二谷カヨ子

問一 線 a c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線①「ぶつきらぼう」の意味として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 落ち着いて堂々としている様子
イ まじめでかた苦しい様子
ウ かざりけや愛想がない様子
エ はずかしそうで落ち着かない様子

問三 にはあてはまる語を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア らくらくと イ はきはきと
ウ ゆうゆうと エ しぶしぶと

問四 線②「ミツエが思っていた話とは違っていた」とありますが、先生の昔話はみんなにどのようにしてほしいということを伝えるためのものでしたか。「ほしい。」に続くように四十字以内で答えなさい。

問五 線③「体操の時間なんてなければいいのに」とありますが、ミツエがこのように思った理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 好きな橋本先生にみつともない姿を見せるのがいやで、はづかしいから。
イ やさしい斉木先生とちがい、橋本先生はきびしく、できるまでやらせるから。

は鉛筆^{えんぴつ}か割り箸^{わし}のようにまつすぐな感じで、なかなか鉄棒に巻きつけない。ミツエは自分がどうなのかはわからなかった。三人とも逆上がりができないままだに、終業の鐘^{かね}が鳴った。

授業がぜんぶ終わると、ミツエは掃除当番の関のぼるに「鉄棒のところ待ってる」と言つて校庭へ走つていった。そしてランドセルを地面に置き、鉄棒をにぎった。さっきの体操の時間、もうすこし鉄棒をやつていたいような気がしたのだ。そんなことは初めてだった。

ミツエが逆上がりの練習をしていると、大山澄子と根本千代がブランコのところに來てしゃがんだ。掃除当番の君塚照子と二谷カヨ子を待つらしい。

何度目かに足を蹴り上げたとき、ミツエは今までとまったく違う感じがして、頭の中が真白になった。何が起こつたのかわからなかったが、眼帯をはずしたときのように、自分のまわりが破裂^{れつ}したような感じがした。自分のまわりの空気にヒビが入つて、空気が割れたような感じがしたのだ。その真ん中に自分がいる。空がぐらぐら揺れて、大きな笑い声を出しているような気がした。

自分が笑っているのだ。自分は今、笑っている、と強く感じながら、ミツエは自分の中からこみ上げてくる笑いを声に出した。今まで笑つたことはなかった、という不思議な感じがした。

(一部表記を改めました)
【干刈あがた「野菊とバイエル」】

ウ 橋本先生がモト村の女の子を特別あつかいするのが、がまんならないから。

エ 逆上がりができずに一人最後まで残ると、モト町のはじになるから。

問六 線④「照子が先生に甘えるような仕草をして」とありますが、照子がこのようにする目的は何だとミツエは思いましたか。これを説明した次の文の1・2にあてはまる言葉を選び。
1 は二十五字以内、2 は八字以内で文中からぬき出しなさい。

モト村の自分たちは 1 ということを 2 ため。

問七 線⑤「つぎは逆上がり」とありますが、男子が逆上がりをしている時、ミツエの心の中には前向きな気持ちと後ろ向きな気持ちが起こりました。この二つの気持ちを、「気持ち。」に続くように、自分の言葉を用い、それぞれ十五字程度で答えなさい。

問八 線⑥「校庭へ走つていった」とありますが、この時と対照的な気持ちが読み取れるミツエの行動が書かれている部分を、文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問九 線⑦「さっきの体操の時間、もうすこし鉄棒をやっていたような気がしたのだ」とありますが、このような気持ちが起きたのは、どのようなことがあったからですか。文中からひと続きの二文をぬき出し、その最初の五文字を答えなさい。

問い十——線⑧「今まで笑ったことはなかった、という不思議な感じ

がした」とありますが、この時の気持ちを説明した文として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 今まで経験したことのない、自信に満ちあふれた気持ちになった。

イ 今までの笑い声とは比べ物にならないほどの大きな声が出ておどろいた。

ウ 今までつらいことばかりで笑えなかったが、初めてうれしさを感じた。

エ 今までに一度も味わったことのない感覚の喜びがわきあがってきた。

問い十一 本文はその後、ミツエが最後の場面で起きた出来事を大山澄子と根本千代に大声で言う場面が続きます。どのような言葉を二人に言ったか、想像して答えなさい。

は「マジックファスナーは、オナモミの実がひつつくことがヒントになって生まれた」といわれるようになった。

オナモミの実の中に、どのようなタネが入っているのかを、調べたことがある。トゲが硬くて鋭いので、トゲに刺されずに中のタネを取り出すのは一苦労であった。中には、ぽっこりしたおいしいようなタネが二個入っていた。

この実のトゲは、「人間の衣服や動物の毛にひつついて移動するのに役立つ」といわれる。それはそうなのだが、その役割が誇張されすぎている。トゲが刺さったためにヒリヒリする指のイタミを感じながら、このトゲには「ぽっこりしたおいしいようなタネを動物に絶対に食べられないように守る役割がある」ことを認識した。

③ オナモミの大きな葉っぱは、夜の長さを正確にはかる。葉っぱは、昼間、光合成をするが、夜にもはたらいている。毎晩、夜の暗闇の中で、夜の長さをはかっているのだ。「何のために、夜の長さをはかるのか」とふしぎがられるかもしれない。しかし、この植物が冬が訪れる地域に生き残るには、葉っぱが夜の長さをはかればならないのだ。

A は、寒さを逃れて移動する。魚の回遊や鳥の渡りなどは、その代表例である。しかし、植物は、寒さを逃れて移動しない。寒さに弱い植物は、タネとなって冬を過ごす。植物の姿では耐えられないような寒さをしのいで、タネは生きられるからである。

しかし、タネをつくるためには、月日がかかる。ということは、植物は、冬の訪れを、寒くなってから知ったのでは間に合わない。寒さの訪れを、寒くなる前に知らねばならない。そのために、葉っぱが、時を刻んで夜の長さをはかる。夜の長さをはかれば、寒さの訪れが前もってわかるのだ。

夜の長さの変化は、気温の変化を前もって教えてくれる。夜の長さがだんだん長くなってくると、そのあとで、寒くなってくる。たとえば、夏は

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

衣料品や靴、バッグ、ベルト、シートの装着などに使われる、ザラザラの布のようなものがある。二つの面を軽く貼り合わせるだけで、ピタッとくっつく。かなり強く引つ張らないと、はがれない。ひつつけたり離したり、何度でもできる。

しかし、一見ただけでは、ひつつくみはわからない。「なぜ、強くひつつくのだろうか」とふしぎである。だから、名前は「マジックファスナー」とか「マジックテープ」とかいわれる。

一九七八年三月二三日、「マジックテープ」を商標 トウロクし、日本ではじめて、生産、販売したのは、(株)クラレである。系列会社クラレファスニング(株)のホームページによると、「このマジックのタネは、一九四八年、植物たちのタネをヒントに生まれた」という。スイスのジョルジュ・デ・メストラルが、犬とともに野に出たとき、自分の服や愛犬の毛に、取り払えないほど、しつこくひつついている実に気づいた。野生ゴボウの実であった。

「なぜ、この実は、これほど頑固にひつつくのか」とふしぎに思い、彼はその実の形態を顕微鏡で観察した。その結果、この実にはたくさんさんのトゲがあり、その先端が釣り針のようにかぎ状に曲がっていることに気づいた。人間の衣服や動物の毛に接触すると、トゲの先が釣り針のように引っかかる。そのために、いったん引っかかるとはがれにくいのだ。この発見をきっかけに、その構造をまねて、貼り合わせるだけで強くひつつくマジックファスナーやマジックテープが生まれた。

この発見は、野生ゴボウの実の観察がきっかけであった。しかし、日本では、野生ゴボウの実あまり知られていないことや、「ひつつき虫」になる^②オナモミの実が同じ構造をしていることがわかった。そのため日本で

夏至を過ぎて長くなり、もっとも長いのは冬至の日で、一二月下旬である。夏を過ぎて長くなり、もっとも長いのは冬至の日で、一二月下旬である。夏至を過ぎて長くなり、もっとも長いのは冬至の日で、一二月下旬である。夏至を過ぎて長くなり、もっとも長いのは冬至の日で、一二月下旬である。

B、もっとも寒いのは、二月である。夜の長さの変化は、寒さの訪れを一、二カ月前に知らせてくれるのだ。だから、夜の長さをはかっていたら、冬の寒さに先行して、冬の到来を一、二カ月前に知ることが出来る。葉っぱが夜の長さをはかり、夜が長くなってくると、芽に「冬が近づいている」という合図を送る。合図を受けて、芽は花を咲かせ、寒くなるまでにタネをつくる。夜の長さで寒さの到来を予知しているから、気温が低下する前に、タネを一、二カ月かけてつくる余裕がある。

オナモミだけでなく、夏から秋に花を咲かせ結実する植物は、冬の寒さに弱い植物なのだ。だから、冬の寒さの訪れを前もって知らねばならない。C、これらの植物の葉がツボミをつくるための夜の長さをはかる精度は、想像以上に高い。オナモミは、夜の長さが八時間一五分ではツボミをつくらないが、夜の長さがあと一五分長い八時間三〇分になれば、ツボミをつくる。オナモミは、一五分間の違いを識別しているのだ。

このしくみは、夜が長くなると花を咲かせる植物たちに共通である。多くの植物は、約一五分間の長さの違いを識別する。ウメ干しに入っている赤シソ、刺身についている青シソの場合、九時間四五分の夜を感じさせてもツボミをほとんど形成しないが、一〇時間の夜を感じさせると、ツボミを形成する。

④ 日本では、夜の長さは一ヶ月間に多い場所では九〇分以上、少ない場所でも二〇分近くは変化する。だから、植物は月日が変わるのをよく知っていることになる。

(一部内容を省略しました)
【田中修「雑草のはなし」】

問一 線 a・b のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 この文章は、前半と後半に分けられます。後半の最初の七文字をぬき出しなさい。

問三 線①「ひつつくしくみ」について

- (1) この「しくみ」は、何をモデルにして作られましたか。それを表す語句を文中からぬき出しなさい。
(2) これはどのような仕組みで「ひつつく」のですか。「く」という仕組み。」に続くように四十字以内で説明しなさい。

問四 線②「オナモミの実」についての筆者の考えとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア オナモミの実は、そのおいしさから多くの動物たちの好物である。
イ オナモミの実とマジックフアスナーの発明とは、密接な関係にある。
ウ オナモミの実のトゲは、中のタネを動物から守る働きをしている。
エ オナモミの実のトゲは、自らを遠くへ移動させる働きしかない。

問五 線③「オナモミの大きな葉っぱは、夜の長さを正確にはかる」について、オナモミは「夜の長さを正確にはかる」能力をどのように活用していますか。それを説明した次の文章の [1]・[2] にあてはまる語句を、文中からそれぞれ指定の字数でぬ

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

知識を身につけることは、^A大切なことだ。しかし、^B当然のことであるが、知識を悪用するなど、もつてのほかであり、^②そのような行いは必ず自分に返ってくるだろう。「情報 [ア] 社会」と言われる今だからこそ、若いみなさんには積極 [イ] に「知識の正しい使い方」を学んでほしい。

問一 線 A「大切」・B「当然」に近い意味を持つ言葉を次のカタカナの語の中から選び、漢字に直して答えなさい。

- カクジツ ムロン キュウキョク ジュウヨウ イッターイ
ゴンゴドウダン イッシンフラン インガオウホウ
ドウコウイキョク

問二 線①・②の意味を表す四字熟語を、次のカタカナの語の中から選び、漢字に直して答えなさい。

- ゴンゴドウダン イッシンフラン インガオウホウ
ドウコウイキョク

問三 線③について

- (1) 「情報 [ア] 社会」とは、「情報を中心として発展していく社会」という意味です。文中の [] ア・イの中に、「性」・「然」・「的」・「化」の中から最もふさわしい漢字を入れなさい。
(2) 「情報 [ア] 社会」を象徴する道具として、「テレビ」を挙げることができる。「テレビ」のニュース番組で流れている情報を受け取る際に、気をつけなければならないのは、どのようなことだと思いますか。自分の考えをのべなさい。

き出しなさい。

・夜が長くなるとその後寒くなってくる。そこで、夜の長さを正確にはかれば [1] (四字以内) を前もって知り、余裕を持って [2] (六字以内) ことができる。

問六 [A] にあてはまる二字の熟語を答えなさい。

問七 [B]・[C] にあてはまる語を次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア そのために イ つまり ウ たとえば
エ ところが オ あるいは

問八 線④について、ここでの「植物」とはどのような植物のことですか。それを表す部分を文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問九 本文の内容に合うものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア オナモミなどのタネは、寒さをやり過して春の訪れを待つために、夜の長さをはかっている。
イ オナモミや赤シソ、青シソは、私たちが考える以上に夜の長さを正確にはかることができる。
ウ 今から四十数年前、あるスイス人が散歩の途中の出来事をきっかけに、マジックテープを発明した。
エ 夏から秋に花を咲かせ実をつける植物の葉は、昼は光合成を行い、夜はその長さをはかっている。
オ オナモミなどの植物は、昼と夜の気温の変化を感じ取ること、夜の長さをはかることができる。

四 次の1～5は、ある小説の始まりの部分です。題名と作者名を、後のア～オから選び、記号で答えなさい。

- 1 或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしゃいました。
2 山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。
3 二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二匹つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことをいいながら、あゝ歩いておりました。
4 これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城があつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。
5 兵隊さんたちが大陸や南方から復員して帰って来るのを、見た人は多いと思います。みなつかれて、やせて、元氣もなくて、いかにも気のどくな様子です。

(題名) (一部表記を改めました)

- ア ビルマの堅琴 イ 注文の多い料理店 ウ 草枕
エ 蜘蛛の糸 オ ごん狐
(作者名)
ア 夏目漱石 イ 新見南吉 ウ 竹山道雄
エ 芥川龍之介 オ 宮澤賢治

五 例にならって、次の①～⑩の二つの空らんに通ずる漢字一字を入れて、慣用句やことわざを完成させなさい。

例 をかける。 を皿にする。 ↓ (解答) 目

- | | | |
|---|------------------------------|------------------------------|
| ① | <input type="text"/> の便り。 | <input type="text"/> を切る。 |
| ② | <input type="text"/> の置けない仲。 | <input type="text"/> が散る。 |
| ③ | <input type="text"/> をはさむ。 | <input type="text"/> が軽い。 |
| ④ | <input type="text"/> の知らせ。 | <input type="text"/> の息。 |
| ⑤ | <input type="text"/> をくだく。 | <input type="text"/> をおににする。 |
| ⑥ | 木に <input type="text"/> をつぐ。 | <input type="text"/> を割ったよう。 |
| ⑦ | <input type="text"/> を打ったよう。 | <input type="text"/> を得た魚。 |
| ⑧ | <input type="text"/> を疑う。 | 小 <input type="text"/> にはさむ。 |
| ⑨ | <input type="text"/> を探る。 | <input type="text"/> を割る。 |
| ⑩ | <input type="text"/> は体を表す。 | <input type="text"/> を売る。 |